

18世紀の思想論争をめぐって

——バルザック作品からのアプローチ

大須賀 沙織

はじめに

本日は、アルティガス＝ムナン先生のお話を受け、今うかがったお話の内容と絡めながら、バルザックにおける18世紀の思想論争についてコメントさせていただきたいと思います。バルザックはヴォルテール主義者の父と、神秘的な母との間に生まれ、両者の傾向をとともに受け継ぎました。それゆえ当然、18世紀、ヴォルテールから多くを受け継いでいます。バルザックが好んで用いた「哲学コント」というジャンルは、明らかにヴォルテールの『カンディド』の系列に入りますが、バルザックはそこに神秘思想や宗教、天使の存在などを色濃く取り入れ、彼独自の世界を作り上げていきました。

1. Débat d'idées / réflexions

まず「débat d'idées」という耳慣れない言葉ですが、アルティガス＝ムナン先生のご発表を通して、「réflexions」を発展させた概念であるらしいと感じました。マリヴォーの『マリアンヌの生涯』は、「il y a trop de réflexions」という引用がありましたが、「réflexions」（省察、考察、思索）が豊富に盛り込まれた小説でした。それは、楽しみ（amuser）や気晴らし（divertir）のための本ではなく、考えさせるための本であるということです。さらに興味を引かれるのは、自分の考えを語るのが主人公の女性であるということです。バルザックにとっても、小説とは単に楽しませるためのものではなく、常にある問題について（結婚と愛をめぐる問題をはじめとして）考えさせるためのものでした。頭に浮かんだのは、バルザックの『二人の若妻の手記』という書簡体小説です。そこでは、ルネとルイーズという二

人の女主人公が、互いの結婚観、結婚生活、恋愛の理想などについて論じ合う、まさに思想論争が物語全体で繰り広げられる作品になっています。結婚の問題はまさにバルザックの関心の中心にあり、結婚という社会制度のもとで葛藤する女性たちを描くことがバルザックの最大の関心だったのではないかと思えるほどです。バルザックにおいて、結婚をめぐる思想論争は、『二人の若妻の手記』のほか、『人間喜劇』の分析的研究に分類される『結婚の生理学』と『結婚生活の小さな悲惨』などがあり、また『オノリーヌ』¹にとりわけ印象的に描かれています。

2. Dévotion

結婚の問題は誰にとっても身近なテーマですので、時代を問わず、作家を問わず、繰り返し取り上げられるのももったもなのですが、マリヴォーの『マリアヌスの生涯』と『成り上がり農民』では、「*dévotion*」（信心、信仰のあり方）のテーマが繰り返し論じられているとのことでした。私にとって新鮮だったのは、マリヴォーはたしかに啓蒙の世紀の作家ですが、その描き方はモリエール、ボワロー、ラ・ブリュイエールなどに見られる風刺と違って、真摯な問いであり、誠実な議論であるという点です。ジャコブもマリアヌスも、信心を頭から断罪するのではなく、本物の信仰心（*piété*）と偽善（*hypocrisie*）とを区別して論じており、18世紀の信心をめぐる、何が問題だったか、どのように議論されたかを具体的に垣間見せてくれています。『成り上がり農民』は、タイトルどおり農民の息子がパリに出て、恋愛の駆け引きと才覚で成り上がっていく物語であり、「成り上がり」という主題も、バルザックの基本テーマの一つですが、マリヴォーがまさにその先駆けとしてこんな小説を書いていたのですね。

3. Robert Challe

続くロベール・シャールの『フランス名婦伝』²の7つの物語でも、愛と結婚が議論のテーマとなっています。ここでも注目されるのは、アルティガス＝ムナン先生

¹ バルザック『オノリーヌ』大矢タカヤス訳、ちくま文庫、2014。訳者解説「結婚制度に苦しむ女たちの代弁者、バルザック」も大変興味深い。

² ロベール・シャール『フランス名婦伝』松崎洋訳、水声社、2016。

が、第6の物語のデ・フランと聴罪司祭（罪の告白を聴くカルメル会の神父）のやりとりを取り上げていることです。意図せず罪を犯した妻を修道院に送ったデ・フランが、自らの死に瀕して、カルメル会司祭に罪の告白をし、罪の赦しを求める場面です。そこには、これまで一度も信仰心を表明したことのなかった主人公が、聴罪司祭の忠告に耳を傾ける素直でひたむきな姿があり、妻と恋敵を赦さなければ、デ・フランに罪の赦しを与えることはできないとし、夫婦生活において男性の不義は赦され、女性は断罪される不平等を説いて聞かせる聴罪司祭の姿があります。バルザックにも、優れた心を持った司祭が感動的な教えを与えている作品がいくつもありますが、そうした司祭の姿を描いた作品は、18世紀の啓蒙の時代、そして、反教権主義が根付いていく19世紀においても、そう多くはありません。司祭、聖職者というものは、中世のラブレールから現代までを思い浮かべても、批判と攻撃の対象であり続けました。それゆえ、18世紀にデ・フランのような男性の姿を描くことは、匿名であるにせよ、勇気のいることだったと思いますし、反宗教の時代への痛烈な問いかけだったのだらうと感じます。

4. Suicide

ルソーの書簡体小説『ジュリー、あるいは新エロイズ』は、バルザックも何度も言及している作品です。ルソーの『ジュリー』では、教育、結婚、道徳的な徳、情熱、名誉などが議論の対象となっており、アルティガス＝ムナン先生はとくに自殺についての議論を掘り下げて考察されていました。当時、自殺はイギリス的な現象だとみなされ議論されていたのですね。たしかにカトリック文化圏のフランスでは、自殺は罪でありタブーであったため、自殺をめぐる議論が18世紀に沸き起こったことが見てとれます。バルザックの作品でも、しばしば自殺について論じられ、とりわけ『田舎医者』という崇高なカトリック精神を体現した作品において、感動的な議論が見られます。

5. Des Grieux et Tiberge

『マノン・レスコー』はデ・グリユーとマノンの恋愛がもちろんメインテーマではありますが、アルティガス＝ムナン先生はデ・グリユーと、彼の友人で聖職への道を歩むティベルジュとの対話に光を当てています。先生のご考察を拝聴しながら

ら、そういえば私も、この作品を読んだときに、ティベルジュの存在と、修道の道に心惹かれる、けれども常にマノンの方に戻って行ってしまうのですが、それでも聖なる道に憧れは抱くデ・グリユーという、この二人のやりとりの部分が、恋愛物語の筋そのものよりも好きだったことを思い出しました。まさにその部分が、マノンへの情熱にまかせて生きるデ・グリユーと、修道者として生き、デ・グリユーにもキリスト教的生き方を説き続けるティベルジュの思想論争の場面だったということですね。正しく生きようとしながら、マノンへの愛に引きずられてしまうデ・グリユーと、友人であるデ・グリユーをキリスト教的な善と知恵の道に引き戻そうとするティベルジュ、この二人の若者の間で、真剣な哲学的、宗教的議論が行われています。そこでは、自由、救い、恩寵といった哲学的、神学的主題が、単に抽象的な思想論争としてではなく、現実の場で、自分の生き方を模索する青年にとっての本質的問いとして取り上げられており、読者である私たちがそうした問題を自分の生き方に引き寄せて考えるきっかけを与えてくれています。

6. Diderot, *Le Neveu de Rameau* — Balzac, *Les Martyrs ignorés*

アルティガス＝ムナン先生は、ご発表の最後にデイドロの『運命論者ジャック』に言及されていました。私にとっては、デイドロというتماず『ラモアの甥』の作者であり、というのも、バルザックが『ラモアの甥』の形式を借りた『知られざる殉教者—現代のバイドン断章』³ (1837) という作品を書いているからです。『ラモアの甥』の舞台はパリのカフェ・ド・ラ・レジャンス、哲学者である「わたし」と、音楽家ラモアの甥という道化の2人の対話ですが、『知られざる殉教者』では、舞台はオデオン広場の、その名もカフェ・ヴォルテール、哲学者と医者と学生が靈魂不滅について議論し合います。このテーマは、若い頃からバルザックの心を占めていた問題の一つで、20歳前後の頃、『靈魂不滅論』⁴ というテキストを書いています。青年バルザックはピタゴラス、プラトン、福音書、スピノザ、マルブランシュ、ラ

³ Balzac, *Les Martyrs ignorés, fragment du Phédon d'aujourd'hui, La Comédie humaine*, t. XII, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1981, p. 719-751.

⁴ Balzac, *Discours sur l'immortalité de l'âme, Œuvres diverses*, t. I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990, p. 527-560.

イブニッツなどに言及しながらこの解決不能な問題への答えを探し求めています。靈魂不滅をめぐるのは、ルソー『エミール』の「サヴォワの助任司祭の信仰告白」もバルザックがこの問題を考えるきっかけの一つとなったことでしょう。『靈魂不滅論』から15～20年後に、バルザックは『知られざる殉教者』でこの問題を再び取り上げることになります。靈魂の存在、死者の出現といった問題を当時の神秘学——動物磁気、スウェーデンボルグ、サン＝マルタン、ウロンスキー——などを引き合いに出しながら、哲学者たちが議論し合います。

7. Balzac, *Traité de la prière*

最後に、『祈祷論』⁵というバルザックのもう一つ別の靈的テキストについて触れて私のコメントを終えたいと思います。というのも、現在の私の研究テーマが「バルザックにおける祈り」であることをご存知である藤原先生が、アルティガス＝ムナン先生の「ロベール・シャルルにおける祈り」⁶（1992）という大変感銘深い論文があることを教えてくださり、二人でこのテーマをめぐる何度かお話す機会があったからです。『祈祷論』はバルザックの初期テキストの一つで、バルザックが精神的危機にあった20歳前後、『靈魂不滅論』と同時期に書かれました。孤独であった彼のそばには、カトリックの友人が一人おり、『祈祷論』を読み、書き上げるよう支え、励ましていました。このテキストでは、バルザックが精神的危機と孤独の中でアビラの聖テレサ（ギュイヨン夫人と混同されながら）に語りかけている姿を見ることができます。バルザックは幼いときから女性的な神秘主義、内的祈りに対する靈的嗜好をもっており、「『神秘の書』序文」では17世紀末の静寂主義論争に身を投じています。バルザックは常に、迫害されたフェヌロンとギュイヨン夫人の側に立っており、教会制度を体現するボシュエとは対立する考えをもっていました。バルザックによれば、フェヌロンとギュイヨン夫人は、初期キリスト教の純粹な教義の継承者でした。ギュイヨン夫人の『短く簡単な祈りの手引き』というテク

⁵ Balzac, *Traité de la prière*, *Œuvres diverses*, t. I, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990, p. 603-610.

⁶ Geneviève Artigas-Menant, « La prière chez Robert Challe », *Autour d'un roman : Les Illustres Françaises de Robert Challe*, Honoré Champion, 1992, p. 41-55.

ストは、バルザックに多大な影響を与えましたが、もしかしたら、藤原先生がいみじくも指摘されていたように、ロベール・シャルもギュイヨン夫人を読んでいたのかもしれませんが。内的祈りと射祷を実践していた彼の姿を見ると、その可能性もありうるように思います。

むすび

19世紀フランス文学、とくにユゴーやバルザックにおいては、物語の中に議論が盛り込まれ、語り手＝作者が自らの思想を披露するということがたえず行われているため、バルザックを中心に読んできた私はその形式を当たり前のように受け入れてきました。しかし今回、「18世紀の小説と思想論争」というテーマでアルティガス＝ムナン先生のお話をうかがい、思想的議論を物語の中に取り込み、読者に提示する、こうした形式を模索し、その基礎を作ったのが18世紀であったということ、バルザックはその遺産を受け継いでいるのだということを確認することができました。また、18世紀、啓蒙の世紀というと、みなが一丸となって宗教の否定、教会破壊に向かっていったようなイメージを抱いてしまいがちですが、こうしてマリヴォーやロベール・シャル、プレヴォーと、個々の作家を丁寧に見ていくと、宗教と信仰をめぐる論争に思いがけない誠実さ、繊細さを見出すことができるということもうれしい発見でした。ありがとうございました。